

日本靈異記が描く経済と人間

岡部隆志

1 日本靈異記と経済活動

日本靈異記（以後靈異記と記す）は経済というものにかなりこだわった説話集である。八世紀は、律令国家が導入した貨幣経済によって、人間の生き方が大きくしんだ時代であった。むろん実際に人々の生活がどの程度貨幣による市場経済に翻弄され、靈異記に描かれたような悪因を多く抱え込んでいたのかどうか、そのことの詳しい実態までは分からない。ただ、靈異記が、特にその悪因を、貨幣による経済活動によって翻弄される人々の営みに求めたのは確かであり、その経済活動によって瓦解していくそれまでの生活の規範に、仏教という外来の観念を基準に、新しい時代の新しい規範を作り上げようとしているのは確かである。

本稿では、靈異記に描かれた経済活動に翻弄される人々の因果応報の物語を通して、人間のどのような生き方が問題となつたのか、そこに描かれた人間の生の様相、そしてそれに仏教はどのようにかわつたのか、そういった問題意識のもとに靈異記のいくつかの話を読んでみたいと思つている。

まず、靈異記から、市・銭・売買・借金等、経済活動に関する記述が見られる話をざっとあげ、その記述の一部を記す。

上七：禪師、尊像を造らむが為、京に上る。財を売りに、既に金・丹等の物を買ひ得たり。還りて難波の津に到る。時に海辺の人、大きな龜四口を売る。（略）時に賊等六人、其の寺に金・丹を売る。

上十二：昔、吾、兄と共に行きて交易しき。吾、銀四十斤許りを得たり。時に、兄、妬忌みて、吾を殺して銀を取りき。

上二十一：昔、河内の国に瓜販人有りき。名は石別と曰ひき。馬の力に過ぎて重き荷を負はず。

上二十七：詐りて「塔を造らむ」と称ひて、人の財物を乞ひ斂め、退りてはその婦と雜の物を買ひてくらふ。

上三十：或いは八両の綿を貸して、強ひて十兩に倍して徴りき。或いは小さき斤の稻を貸して強ひて大きな斤に取れり。

上三十四：盗みし絹は木の市人に売る。

上三十五：時に其の尊像、人に盗まる。悲しび泣きて求むれど

も、終に得ざりき。更に知識を停め、放生せむことを念ひ欲ひ、其の難波に行く。市を徘徊りて帰らむとす。

中四：(三野の狐)少川の市の内に住み、己が力を恃み、往還の商人を凌ぎ幣けて、其の物を取るを業としき。

中六：使を四方に遣わし、白檀、紫檀を求む。乃ち諾楽の京に得、錢百貫を以て買ふ。

中十六：「十貝の直に充つるに、米五斗を欲ふ」といふ。乞ふが如くにして贖ひ、法師を勧請し、呪願せしめて海に放つ。

中十七：銅像六体盗人に取られき。(略)「錢を鑄る盗人、取り用ゐむに便なく、思ひ煩ひて棄てたるならむ」

中十九：「我、今日より三日を経て、諾楽の京の東の市にかならず逢はむ」といふ。(略)「経の直欲ふこと幾何ぞ」といふ。答ふらく「巻別に直、錢五百文を欲ふ」

中二十二：一人の盗人有りき。道路の辺に住みき。(略)常に寺の銅を盗み、帯に作して銜し売れり。

中二十四：大安寺の修多羅分の錢三十貫を借りて、越前の都魯鹿の津に往きて、交易して運び超し、船に載せて家に將ち來らむとする時に：

中二十七：此の嬢、彼の里の草津の川の河津に至りて、衣を洗ふ。時に、商人、大船に荷を載せて乗り過ぐ。

中二十八：門の椅の所に、錢四貫有り。短籍を著けて、注して謂はく、「大安寺の大修多羅供の錢」といふ。

中三十二：紀伊の国名草の郡三上の村の人、薬王寺の為に、知識を率引して、普く薬分を息しき。その薬料の物を、岡田

の村主の姑女が家に寄せ、酒を作り利を息す。

中三十八：教化して室の戸を開きて見れば、錢三十貫を隠し藏めたり

中四十二：櫃を開きて見れば、錢百貫有り。(略)三年過ぐ。千手院に収めたる修理分の錢百貫なしときく。

下三：弁宗、其の寺の大修多羅供の錢を三十貫受け用ゐて、償ひ納むることを得ず。

下四：舅の僧に錢二十貫をいらへて、装束を為り、任せられし國に向ふ。歳余を歴て、貰れる錢一倍にして、僅に本の錢を償ひ、未だ利の錢を償はず。

下五：其の布施の錢の中五貫を、師の弟子、窃かに盗みて隠せり。後に、錢を取らむが為に、往きて見れば錢無し。

下二十三：大般若經に云はく「凡そ錢一文は、二十日に至れば、倍すこと、一百七十四万三貫九百六十八文に倍すなり。故に一文の錢を窃みて、盗み用ゐることなかれ」

下二十六：斗の升と斤とに兩種を用いて、他に与ふる時には七目を用ゐ、乞ひ徴る時は十二目を用ゐて取む。息利を強ひて徴ること太甚だし。

下二十七：去年の十二月下旬、元日の物を買はむが為に、我、弟公と市に率て往く。持てる物は馬・布・綿・塩なり。路中にして日晚れ、竹原に宿り、窃かに弟公を殺して、彼の物をとる。深津の市に至りて、馬は讃岐の国の人に売り、自余の物等は、今に出して用ゐる。

八世紀の律令国家は、税の徴収や新都造営の労働力の確保

等、中央集権国家体制の維持のために銅銭を流通させ、市を整備するなど貨幣による市場経済システムを整えていった。そのことが人々の生活にもたらした影響は大きいものだった。ここにあげた話は、いずれも、その影響の具体例とでもいうべきものである。

靈異記の上巻序文で景戒が「熟世の人を暇るに、方に鄙な行を好めり。利養を翹みて、財物を貧ぼること、磁石の鉄山を拏して鉄を嘘ふよりも過ぎたり。他の分を欲ひ己が物を惜しむこと、流頭の粟の粒を粉きて糠を啖むよりも甚だし」と述べているように、八世紀の社会は人間というものを悪しきものにしていった、という認識が靈異記にはある。その悪しき影響は、「利養を翹みて、財物を貧ぼる」「他の分を欲ひ己が物を惜しむ」といった言い方によくあらわされている。つまり、貨幣経済によって人々は、農耕社会の経済システムでは得られなかった私的な利潤(富)の追求が可能となった。むろん、実態としては、貨幣経済は全国的に広がっていただけではなく、畿内もしくは各地方の役所の置かれていた地域を中心とした限定的なものだったが、少なくとも、その地域にあつては、人々は富を追求し、その追求の仕方では、人よりも多くの富を手にすることが可能であった。従つて、富の追求に過剰なあまり、社会の秩序や道徳的な規範を逸脱する人たちがあらわれる。ここにあげた靈異記の話の多くは、そういった人たちの物語でもある。

ただ、一方では、これらの話は、経済活動の活発さを物語る。これらの話に共通するのは、流動化する人・物もしくは貨

幣にとまらぬ出来事ということでもある。人・物・貨幣の移動は富を生みそして富を無くす。金や物を貸し利息を取るのも経済活動であり、移動そのものである。こういった移動を象徴的に具体化しているのが市である。これらの話の多くには、市が重要な場面になっている。市を中心に人・物・貨幣は移動し、そこから富が生まれるからだ。人・物・貨幣の移動による富は人の心を劇的に変えてしまう。その変化に、仏教による因果応報譚の有効性を見いだしたのが靈異記であるとも言える。従つて、靈異記は、流動化する人・物・貨幣に着目する。

2 馬を殺してしまった男の悲劇

上巻二十一「慈悲の心無くして、馬に重き駄を負はせ、現に悪報を得し縁」は、馬に商品に乗せて商売をしていた男の物語であるが、馬に重さの限界を超えた荷を乗せて馬が涙を流すほどに酷使し、そのあげく使いものにならなくなった馬を殺してしまつたために報いを受けたという話である。この話は、利益を生み出す人・物・貨幣の移動が何を媒介にし何を犠牲にすることで成り立つのかをよく示している。

馬は持ち主に利益をもたらす重要な移動の手段である。むろん、この馬にもそれなりの経費がかかっている。馬の交易手段としての価値は安くはなかつたはずで、従つて、馬を酷使してその交易手段を失うことになれば、この馬の持ち主は大損するはずである。商売という経済的な面からも馬を酷使することは賢明ではない。さらに、馬もその持ち主と生活を共にする生き物である限り、そこに情によつて結ばれる関係が成立するはず

である。馬が目から涙を流す、という馬（他者）の痛みに耐えられる程人間は強くはない。従って、その涙を無視して酷使したとすれば、この男は本来人間が持っているはずの情を失っている、ということが出来る。

この馬の持ち主は、その意味で、人・物・貨幣の移動の時代にあつて二重の意味において失敗をした。一つは、経済生活を上手に生きるための合理的な判断を欠いたことであり、もう一つは人間的な情を失った、ということである。

だが、この男にも馬をいたわる愛情や、馬を酷使して馬を死なせればそれだけ損になる、という判断力を少しは持っていたと考へてもおかしくはない。とすればどうして、この男はそこまで馬を酷使してしまったのか。理性的な判断を失わせるほど、現実の経済生活は厳しかった、ということか。むろん、男の物質的な欲望が強すぎて、理性的判断を失わせたとも、あるいは個人的な事情で金儲けをせざるを得なかったとか、そういうことも含めて、結局は、馬を酷使して多くの利益を上げればそれだけ儲かる、という経済の論理が、人間の情や理性を失わせるほどに社会を覆っていた、ということであろう。

言い換えれば、富を生み出す馬に情を抱き、適度にいたわりながら経済的な利益を追求することが、実はそれほど簡単ではないということでもある。そこに経済というものの非情さがあると言つてもよい。馬に情を抱けば利益が落ち、利益を上げるためには馬の生き物としてのあり方を疎外しなければならぬ。馬は「労働力」という意味では人間であり、交易の手段であるという意味では人と人との関係であるが、利益追求を一義

とした貨幣経済は、利益をあげるそれらを対象化しながら同時にそれらから情というあり方を排除するのだ。この矛盾を上手く切りぬけた者が、相応の利益をあげ、切りぬけられなかった者は、たとえ利益をあげたとしても、その非情さに人間性を売り渡して結局は破滅していくかあるいは破滅を期待される。この男は、その破滅の道を辿つたということだ。

たぶん、世の中にはこういう経済の非情さに何とか耐えながら、馬をいたわるような人々の方が本当は多かつたに違いない。でなければ、社会というものは成立しないはずだ。が、中にはこの男のように馬を殺してしまう者もいたのだ。

ある意味で、馬を殺した男の行為は過剰さである。利潤を上げる行為自体が人・物・貨幣の移動であるとするれば、その移動の速度に遅れまいとする人の身体や精神の動きは当然過剰になつていく。男は、馬を酷使してはいけないことは分かつていた。だが、それを止められなかった。いつのまにか、富を得るために暴走する自分すなわち過剰に移動する自分がそこに存在した、ということだ。

ということとは、この馬の持ち主が本当に失つたものは、この社会を上手く（適度に移動して）生きていくはずの自分そのものなのである。このような男の例が多かつたとは思わないが、少なくとも、靈異記で取り上げなければならぬほど、人間というもののあり方の変化を象徴する具体例であつたことは間違いない。

富の追求のために身を滅ぼすほど過剰になつてしまふ生き方は、下巻二十六「非理を強ひて債を徴り、多の倍を取りて、現

に悪死の報を得し縁」における田中の真人広虫女にも見る事ができる。

3 情を失った広虫女

広虫女の夫は讃岐の国三木郡の大領（長官）であり、とても裕福であった。「馬・牛・奴婢・稲・銭・田畑等」を所有していたとある。広虫女の生き方は慳嗇で、酒に水を加えて売ったり、貸し出すときは小さな升で量り、返してもらったときは大きな升で量るとか、利息を取るにも、「非理にして、或は十倍に徴り、或は百倍に徴る」とある。とにかくあくどく金儲けをしていた。この広虫女はその悪因の悪果として、半身牛になって生まれ変わる。靈異記の中でも、過剰なほどに富を追求する人物としてこの広虫女に勝る人物はいないであろう。その強欲ぶりや情のなきにおいて際だが、その悪果の凄惨さもまた靈異記の中で際だつ。

それにしても、豊かな地方豪族の妻が何故これほどまでに富を追求しなければならぬのだろうか。広虫女は自分の財産を築こうとしていたのだろうか。恐らく広虫女の富の追求は、広虫女個人の富の追求ではないはずだ。七一年に律令国家は蓄銭叙位令をだし、銭を多く貯えた者には位階を授けた。つまり、銭で位を売り、集めた銭を放出して貨幣経済を潤滑ならしめようとしたわけである。そのため、役人や地方豪族は銭を稼いで貯えようとした。広虫女の夫は大領で外従六位上であるが、この位を銭で買ったかもしくはもつと上の位階を銭で買ううとしていた可能性がある。そう考えれば、広虫女は夫の出世

のために銭を集めていたとも言え、夫のために尽くす妻ということになる。

いずれにしろ、広虫女があくどく稼いだ財産は広虫女個人のものでなく広虫女が属す一族に帰すものであろうが、その悪報が妻である広虫女個人に来るのは、経済活動における富の追求が家や豪族という単位ではなく、個人の問題であるとする靈異記の認識に基づいていると思われる。恐らく、広虫女は地方豪族である田中一族の財政担当及び営業をしていたのだ。その仕事ぶりはかなり有能だったに違いない。だが自身の身の破滅をもたらすほどにそれはかなり過剰であったのだ。「償を人より渋り取りて甘心を為さず」とある。債務の取り立てに情を差し挟まなかった。馬を酷使して死なせた男が馬に対して情を抱かなかつたことと同じである。たとえ、その富の追求が一族のためにしろ、情を排除した広虫女は自身を失ってしまったということになる。

この物語で注目すべきは、この女の悪因が、不公正な売買、不当に高い利息、にあることである。女は閻羅王の前に召されて三つの罪を告げられる。その三つとは、「三宝の物を多く用ゐて報いずありし罪」「酒を売るに多の水を加へ多くの直を取りし罪」「斗の升と斤とに兩種用ゐて、他に与ふる時には七目を用ゐ、乞ひ徴る時は十二目を用ゐて収む」罪である。三宝の物を用いて報いなかった、というのは、寺の財物を私的に流用していたのではないかという解釈がある。報いずとあるから、寺から財物もしくは銭を借りたが返さなかった、と解してもよいだろう。重要なのは、これらの罪はいずれも、物（商品）もし

くは貨幣)の移動、すなわち、交換(交易)によって生じている、ということだ。

罪の言及が、酒に水を加えたり、貸し借りにおける秤が一定していないというように、交換の現場のかなり細かなところに及んでいることに注目したい。貨幣経済を維持することに全力をあげる律令国家なら、このようなアンフェアなやり方は取り締まらなくてはならない。放置すれば、貨幣を主とした交換経済の信用が落ち、律令国家の根幹を危うくするからだ。だが、ここで罪だと言及するのは、因果応報を説く仏教の論理であり、この論理は、貨幣経済の現場におけるかなり細かなルールにまで立ち入っているのである。

確かに靈異記の説話には利息や貸し借りをめぐるトラブルが多い。それにしても何故そのようなトラブルにこだわるのか。たぶん、そこに、つまり、人・物・貨幣の移動としての流通過程に生じる人のふるまいにこそ、靈異記が想定する人間の弱さ(悪)があらわれると判断されているのだ。広虫女の説話の最後は次のように締めくくられている。

経に説きたまへるが如し。「物を借りて償はぬときには、馬牛と作りて償ふ云々」とのたまへり。負へる人は奴の如く、物の主は君の如し。負へる人は鳩の如く、物の主は鷹の如し。唯し物を負すと雖も、非分に徴れば、返りて馬牛と作りて、更に償ふ人に役はる。故に過ぎて徴りて迫むること莫かれ。

借金をして返さなければ馬牛に生まれ変わって酷使される。だが、貸した側も過剰に取り立てればやはり馬牛に生まれ変わって酷使される、と言うのである。借りた物は返し、貸した物は非情に取り立ててはいけない、という論理であるが、よく考えれば、この論理自体は矛盾をはらんだものである。

借りたら返せそうしないと馬牛になるぞ、と言ったところで、返せない事情がそこには必ず介在し、そこを斟酌しないで馬牛になるぞ、という論理は、それこそ非情な論理となろう。非情に取り立てたら馬牛になるぞ、と言われても、どこまでが非情でどこまでが非情でないのか、そこに客観的な基準があるわけではない。生活がかかっていたら、取り立てる側も返せない側も必死だ。広虫女の説話の最後の基準を冷たくあてはめれば、貸した側も借りた側も両方馬牛に生まれ変わってしまうというケースが出てきかねない。

とすれば、この最後の論理は、人・物・貨幣が移動する時代における、生活の個々の場面での、微妙なバランスの取り方を説いているのだと言うしかない。貸し借りが発生する経済活動を否定はしない。が、借りる側も貸す側も人としての情を排除して、広虫女のようにただ物や貨幣の移動だけに夢中になってはいけない、そのバランスをうまく保って生きろ、そのバランスを失えば人間の悪があらわれる、そのバランスの中に人間らしさというものがあるのだ、ということなのだ。

靈異記における仏教は、貨幣経済における人・物・貨幣の移動を否定していない。そのことは注目しておくべきだろう。つまり、その移動に伴う富の増殖を肯定しているということであ

る。法外な利息は戒めているものの利息を肯定しているということだ。

利息は、流動的な経済活動を前提とする。つまり、経済活動が未来を肯定的に描くから、利息が発生する。利息が成立しない社会は、経済活動をやめた社会である。旧ソ連が崩壊したのは、金利というものがなかったからだと言く経済学者もいる。その意味では、高い利息は、それだけ経済活動が活発であることを示しているが、その活動に見合わない高い利息は不当なものになる。いずれにしろ、靈異記における仏教はこの利息の発生する経済活動とその経済活動を生きる人間を疑ってはいない。その意味で靈異記では極めて近代的な宗教として描かれているのである。

4 現世利益の発見

日本の長者譚の物語は多くの場合、共同体の外部に長者の原因を求める構造になっている。それは、農業生産を主とする社会では、農業生産全体に責任を負う支配者を除いて、一部の人間が富を増殖させることにはないので、外部（神もしくは異人）にその原因を求めざるを得ないのだと説明されている。が、ある程度貨幣経済の浸透した社会ではどうなのだろう。人・物・貨幣が動く社会では、富の増殖は偏在的に起こり、当然貧富の差が起こる。靈異記では「富める」と形容される人物の話が七話あり、貧しいと形容される人物の話が八話ある。「富める」者は悪因を為して悪果を受けるといふ展開が多いが、「貧しい」者は、逆に仏の力によって窮地を脱する、という話が目立つ。

靈異記における経済活動の描かれ方を見る限り、「富める」者は、貸し借りの際にはかりの重さを変えたり、高利貸しをしたりと、過剰なまでの経済活動と一体として語られている。つまり、その富の蓄積の原因は外部に由来するわけではなく、きわめて現実的な方法によっていると認識はされている。が、外部によってもたらされる、という話がないわけではない。代表的なのは、「大安寺の大修多羅供の銭」である。中巻二十八話は、きわめて貧しい女が、富を与えて欲しいと大安寺の丈六の仏に何度も祈願したところ、銭四貫が家の前に置いてあり見ると「大安寺の大修多羅供の銭」だったので寺に返した。ところが、今度は庭に置いてある。返すと、今度は家の戸の敷居のところに置いてある。それも返すと、不思議に思った寺の僧がその金を女に与え、女はその金によって裕福になるといふものである（同様の話が中巻四十二話にもある）。

この銭四貫は「神からの贈与」である。つまりこの話は外部に由来する長者譚ということになる。ただ、子細に見ていくと、この貧しい女は大安寺の丈六の仏に「我、昔の世に福因を修せず。現身に貧窮の報を受け取る。故に我に宝を施し、窮れる愁へを免れしたまへ」と祈願している。富を得たいというきわめて現実的な要求をしているのである。興味深いのは、何故三度も「大修多羅供の銭」を返したのか、ということである。大安寺の大修多羅供の銭という封印が押してあるので、そのまま自分のものにしては盗んだことになる、ということであろう。が、実は、それが貨幣であったからだともある。貨幣は、それ自体には価値がない。つまり、交換しなくては宝とは

ならない。とすれば、貨幣は、この女を交換という経済活動に巻き込むことになる。従って、そんな面倒な贈り物は、純粹な「神からの贈与」とはとても思えなかつた、ということではないか。

結局、貨幣を「神からの贈与」として受け取つた女は裕福になる。ただし、贈与を受けたから裕福になつたのではない。その錢四貫を元手に富を増殖させたから裕福になつたのだ。少なくとも、女は、貨幣による交換に失敗しなかつた。どうせあく錢だからとばくちで儲けた金を浪費してしまふ者のようにはならなかつた。だとすれば、この錢四貫は大安寺の仏から借りたという解釈もなりたとう。実際に大安寺の修多羅供の錢は、大安寺内に置かれた經典の研究や講説を行う組織の基金らしく、貸し付等を行つて基金の運営をしていたらしい。その例として、中巻二十四話に「大安寺の修多羅供の錢」を借りた男の話があり、下巻三にはやはり修多羅供の錢を返せない僧が十一面觀世音に救われる話がある。とすれば、中巻二十八話における「大修多羅供の錢」は純粹な「神からの贈与」なのではない。神（仏）の側もその錢の増殖を期待し、その利息を含めて神（仏）の側に返ることが期待された錢なのだ。

この女が大安寺から大修多羅供の錢を借りたとした場合、この話が「神からの贈与」として語られる理由は、この女の手による富の増殖が人々の予想を超えたからだと思われる。誰もがそんなにうまくいくわけではない。だからこそ、その富の獲得は人々にとって畏敬の対象となる。そこに、元手になつた金こそがその成功の秘密（神の力）だと人々は幻想する、というこ

とである。富の増殖は多くの場合悪因悪果として語られるが、このように、逆の場合もあるのだ。

上巻三十一話で語られる話も、富の増殖が悪因として語られない例である。御手代の東人は吉野山にこもつて修行する。觀音の名号を唱えながら「南无、銅錢満願、白米万石、好き女多、徳施したまへ」と祈るのである。山を下りた東人は、富裕な家の娘の病気を治しその娘の婿になる。その娘が死ぬと、その姪と結婚しその家の富を得る。靈異記はその富の獲得を「修行の験力、觀音の威徳なり」と語るが、この話は、結婚という人の移動もしくは交換がテーマになっている。いわゆる逆の玉の輿といった設定だが、結婚という移動を繰り返すことで富が増殖し、そのきっかけはやはり神の側に求められている。普通の男がそんなにうまく結婚によって富を得られるはずはない。それが出来たとすれば神の力が働いているはずだ、という幻想がやはりこの話にはある。

これらの話は、いずれも現世利益の話になっている。女は大安寺の仏に「宝を施し」てほしいと祈願し、男は吉野山で觀音に金銭と米と好き女を願う。女が大安寺に福を願うのは、この世で豊かに生きたいための願ひであつて、あの世での救済ではない。男もそうだ。その結果として、女も男も富を得る。確かに、神（仏）の力によって富を得るといふ話になっているが、女も男も、この流動的な社会を果敢に生きていることに注目すべきだ。仏にこの世での富を願うことも、吉野山で修行することも、ある意味では、人々が旺盛に経済活動を行うように、この世を旺盛に生きるレベルとしてあるということだ。女は大修

多羅供の銭を元手に利益を上げているし、男は、御利益を願って吉野山に修行に入ったり、病気の娘を直し、その娘の情愛を勝ち取る。その生き方に移動する時代を乗り切るたくましさといったものを感じとることができよう。

つまり、現世利益とは、人や物やお金が行き来する流動的な社会にあってこそ成立する話なのだ。富の増殖は本当はこの流動性そのものがもたらす。だが、その当事者にはその富の獲得を確信することは出来ない。それが、交換によって成り立つ市場経済の原則である。特に、貨幣という流動性そのものが市場経済を支配すれば、結果的に富を得たとしても、富を得るまでは誰も富が得られるのかどうか確信は持てない。従って、誰もが不安を抱えて生きることになる。大修多羅供の銭で富を得た女も、結婚を繰り返して富を得た男も本当は相当の不安を抱えていたはずだ。それは、広虫女にしても馬を殺した男にしても同じだろう。そこに神（仏）の介在する理由がある。

農耕社会であれば、福の到来は、種を蒔き収穫するという自然の時間に支配されてしまう。貨幣経済化した社会では、福の到来は、人・物・貨幣の交換によって生まれるのであるから、そこに自然の時間は介在しない。つまり人々の不安はより現在のな問題なのである。従って、農耕社会のように、正月に予祝儀札をやってその年の不安を鎮めている暇はない。今のこの現在を福に変えてしまう即効性の祈りが求められるのだ。現世利益とは、そのようなより流動化した社会に生きる人々によって生み出されたのである。

5 停滞することのない生

以上見てきたいくつかの例から見える人間の生き方は、停滞することのない生であったと言える。ある場合にはその生は過剰になり情を失って破滅していく。ある場合には、神（仏）の御利益でその過剰さは悪果に結びつかない富の増殖となる。

以上のような生き方から神（仏）の介在や倫理的な解釈を消してしまえば、そこにあらわれるのは、人・物・貨幣の移動する時代にあつて、その移動に遅れまいとする、別な言い方をすればこの不安定な世の中をとにかく生き抜こうとするエネルギーであろう。

多田一臣は、靈異記で描かれた人々の不安を「国家と村落のはざまに投げ出された人々の不安」と説明する。その不安を仏教がすくい取ったのだと言う。確かに律令国家の成立によって、共同体における個は直接国家に向き合わざるを得なくなる。それは、同時に、律令国家が推し進めた貨幣による市場経済のただ中に投げ出されることをも意味したろう。村落からあふれた人々を吸収し職を与えるほどに都市が発達していなかった八世紀の社会では、人々は、それこそ村と都市の間に投げ出されたのである。ただし、そういった人々の不安に対応したのは仏教だけではない。平城京跡からは、木製の人形、刀形、馬形、鳥形、土製の馬形、土器の外面に人面を描いたもの等、呪術に用いられたと思われる道具が多数出土している。それらは律令制とともに中国・朝鮮から渡来した呪法と関連し、「都城や地方の官衛が造営され、そこに多くの人々が村から集めら

れ、あらたに住みつくようになった場所にこれらの新しい呪術は使われはじめた」というようなものであった。これらの呪術は主にツミやケガレの祓いの儀礼に用いたものと思われるが、当然、そのツミやケガレとは、人・物・貨幣の流動する社会において増殖する富の対極にある身の不幸であり、その不幸もまたその流動する社会の中で増殖するものであったのだ。だからこそ、呪術も隆盛を極めたということだ。

三浦佑之は靈異記のいくつかの話を分析し八世紀になって家族という問題が顕在化してくると述べている。つまり、班田制で否応なしに個が顕在化し、その個の間で親子という関係であっても貸し借りが発生するような社会状況で、親子とは何かといった問題が浮上したのだと言っているのである。人と人の関係もまた停滞することはなかったのである。

八世紀における律令の制定、貨幣による市場経済への移行は、対中国との関係に促された上からの改革の性格が強く、まず社会の市場化が先行して律令や貨幣経済を促したものでない。その意味で、その変革は、人々の生活をかなり混乱させたに違いない。だが、靈異記の話を読む限りでは、人々は国家と村落の狭間で、あるいは村落と都市の間でたくましく生きていた。その生き方の多くは悪因とされるものであったにせよ、その悪因は、流動化する不安定な時代を生きる一つの積極性であったことは確かである。仏教はその積極性を肯定しながらも抑制し、神（仏）を頼らない活動は、この世を生きる微妙なバランスを失うことだと説くのである。

上巻十三話に、貧しい女が清浄な生活を営み仙人の靈草を食

べ空へ飛んでいったという話がある。この話が興味深いのは、神（仏）に富が欲しいと願わないうところである。むしろ、徹底して生活を律する。七人の子ともがいるが、「常に家に往りては、家を浄むるを心とす。菜を採み調へ盛りて子を唱ひ、端座して咲を含み馴れ言ひ、敬ひを到して食ふ」とある。このような慎ましい抑制のきいた生き方が、結果として仙人になるという、仏教的訓話とは違う話なのだが、注目したいのは、この女は人・物・貨幣の移動とは全く無縁であることである。むしろ、流動する生き方に抗したときのある理想型がここに描かれていると考えることができる。それはその生活において自らを律する生き方である。この女の律し方は並みではない。だからこそ、それは仙人になるほどのものであると見なされたのだが、逆に考えれば、ここまで積極的に自らを律しなければこの経済の論理に翻弄された社会に抗することはできないということでもある。

本来、この女のような生き方を支えるのは仏教であったはずだが、靈異記の描く仏教は、むしろ、この女とは対極にある人・物・貨幣の移動のただ中を生きる人々の生き方を支えようとした。それだけ、現世の現在を生きる人々が抱え込んだ問題は圧倒的だった、ということではないだろうか。

注(1) 引用は多田一臣校注『日本靈異記』（ちくま学芸文庫一九九七年）によった。

(2) 栄原永遠男『奈良時代流通経済史の研究』（塙書房一九九二年）参照。

- (3) 多田一臣校注『日本靈異記下』（ちくま学芸文庫一九九七年）解説。
- (4) 体系日本史叢書『生活史Ⅰ』（山川出版社一九九五年）
- (5) 三浦佑之『万葉びとの「家族」誌』（講談社一九九六年）